

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	張 慧珍
論文題目	一七世紀徳川外交の研究
<p>審査要旨</p> <p>徳川幕府の対外政策に関しては、鎖国・海禁の観点から様々に研究が行われている。また、海禁の観点から、日本型華夷意識・秩序（通信国・通商国）、四つの口（長崎・対馬・薩摩・松前）などに関する研究が行われている。鎖国・海禁、日本型華夷意識・秩序の概念は、江戸時代を通して用いられているが、鎖国・海禁の用語は 19 世紀に入って用いられ、通信国・通商国よりなる日本型華夷秩序の形成は 18 世紀末以降、19 世紀のことである。論者は、19 世紀に通用される概念をもって 17 世紀を理解してよいのか、と根本的な疑問を提起する。論者が「一七世紀徳川外交」を課題に取り上げる理由はここにある。</p> <p>論者は 17 世紀を華夷変態期と捉える。すなわち、中国において明から清への王朝交代が起こった。1583 年韃靼においてヌルハチ（清の初代皇帝）が女真族の統一戦争を始めた。女真族は 1616 年に後金を建国し（36 年国号を清と改める）、27・36 年と二度にわたって朝鮮を侵略し服属させた。1644 年に明が滅ぶと、清は北京に遷都し、明再興を目指す南明政権を倒して、62 年中国を征服した。1673 に滅清復明を呼号する三藩の乱が発生したが、81 年それを鎮圧し、83 年台湾の鄭氏が降服したことにより、清の中国支配が確立し、清を中心とする東アジアの華夷秩序が成立した。本論文は、こうした華夷変態に近世日本（徳川幕府）がいかに向き合ったか、脱華夷秩序の観点から論じた研究である。</p> <p>本論文に対する評者の評価を述べると、第一は、徳川外交の姿勢を中国（明・清）の華夷秩序から距離をたもつ脱華夷秩序と捉える観点である。日明関係に用いられた勘合という言葉がある。明は足利氏を日本国王に冊封し勘合（渡航証明書）を与えたが、豊臣・徳川氏は勘合を単に日明間の公貿易を意味する言葉として用いている。徳川家康は日明講和交渉において、明の勘合之符に日本の異国渡海朱印状を対置させて、対等な日明関係を追求した。18 世紀初期、将軍「国王」化がはかられる。こうした中国に対する外交姿勢から、論者は脱華夷秩序という観点を提起する。</p> <p>第二は、徳川外交（家康の駿府外交）を東西世界をつなげる観点から論じている。豊臣秀吉の朝鮮侵略後、家康は日明講和交渉を推進するが、同時にマニラのスペイン人と交渉し、浦賀開港を企図した。すなわちメキシコと貿易を実施し、中国—日本（長崎—浦賀）—メキシコ（ヨーロッパ）という東西貿易を構想した。これも脱華夷秩序の一環である、と論者は述べる。しかし、1615 年に日明講和（日明貿易）が不調に終わったため、メキシコ貿易は成り立たなくなった。一方、スペインは布教と貿易を一体化させ日本に迫ってきたが、家康はこの 2 つを分けて対応した。両者の思惑が食い違い、浦賀港は閉鎖された。1616 年、徳川幕府はスペインの要求を逆手にとり、禁教と貿易統制を一体化させた元和 2 年 8 月 8 日令を出し、鎖国・海禁と呼ばれる方向に対外政策を転換した、と論者は論じる。</p> <p>第三は、異国を一つにとらえるのではなく内側異国と外側異国に分け、異国・異域と向き合う四つの口は明清交替期に設定され直したことを指摘し、長崎を異国管理総本部と位置づける。また、徳川家光は家康の神格化を推し進め、日光東照宮を造替し、神徳に基づく外交を展開し、朝鮮通信使・琉球使節を日光に参詣させた。東照宮イデオロギーも明清交替への向き合い方だった、と論じる。</p> <p>最後にもう一つあげると、将軍「国王」化を脱華夷秩序のしるしと捉える論点である。徳川将軍は朝鮮国王に対し日本国源某と称し、日本国王と称さなかった。1635 年、徳川幕府は、日本が明の華夷秩序下にないとして将軍の外交称号を大君と定めた。次に華夷変態後、1710 年に新井白石の建言を入れ、大君から</p>	

国王へ復号した。この国王は中国から冊封される国王ではなかった。その証左として、白石が、1596年に豊臣秀吉が明の日本国王冊封を拒絶したという議論を展開していることを挙げる。さらに、白石は公家の官位制と別に武家の勲階制を提唱し、天皇と将軍の分離をはかった。これらは、将軍「国王」が中国皇帝からも日本天皇からも自立した存在であることを論じている。

しかし、本論文に何も問題がないわけではない。家康の駿府外交体制から家光の境界外交体制、明清交替に対する東照宮イデオロギーに基づく外交などは説得的であるが、華夷変態後の将軍「国王」化に至る過程の分析に緻密さがほしい。異国・異域と境を接する対馬・松前両藩が「無高」大名より「○石格」大名となる。異国と接する長崎奉行・薩摩藩の官位問題などは、清の華夷秩序に対する徳川幕府の一つの向き合い方を表している。こうした一つひとつの総合化の上に、将軍「国王」化はあったはずである。

とはいえ本論文は、鎖国・海禁にかわる脱華夷秩序という観点から「一七世紀徳川外交」を論じ、これまでにない徳川外交論を展開していることは間違いない。近世対外関係史研究に新しい知見を付け加えたといえる。以上述べたことに鑑み、審査員は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値すると判定する。

公開審査会開催日	2012 年 6 月 28 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	文学博士(早稲田大学)	紙屋 敦之
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	博士(文学)早稲田大学	谷口 眞子
審査委員	早稲田大学文学学術院・名誉教授	文学博士(早稲田大学)	深谷 克己